# 温泉と文学

文芸評論家
関東学院大学教授
富岡幸一郎（とみおかこういちろう）

最近、『温泉小説』（アーツアンドクラフツ刊）というタイトルのアンソロジーを監修した。文字通り温泉を舞台にした小説を集めたものである。

実際に作品を選ぶ作業は編集部にまかせたが、温泉を描いたものは思いのほか少ないのだ。世に温泉についてのエッセイ、随筆のたぐいはいっぱいある。作家、詩人、評論家らによって、いわゆるガイドブックとは一味違う文章で味わい深いものもある。しかし、小説となるとなかなか選択がむずかしい。

結局、夏目漱石、泉鏡花、芥川龍之介、川端康成、坂口安吾、太宰治、岡本綺堂、織田作之助、林芙美子といった作家の「近代篇」、そして井伏鱒二、田宮虎彦、島尾敏雄、大岡昇平、獅子文六、中上健次、筒井康隆、田中康夫、津村節子、佐藤洋二郎といった作家の「現代篇」と十九人の短篇がそろった。

これを通読してみると実に面白い。日本人は風呂好きであり、地震大国であるにもかかわらず、手拭を頭にのせてゆったり湯につかっている。かくいう私も温泉は好きである。ただし山登りがもっと好きなので、温泉と山を切りはなすことはできない。冬の八ヶ岳に登って吹雪きのなかでヘッドランプを灯けながら、本沢温泉という天然の露天風呂につかったりしたこともある。病膏肓（やまいこうこう）に入るというやつだ。

漱石は『草枕』であるが、この小説は三章から終章までが温泉場が舞台になっている。今回のアンソロジーでは編集部の執念で、各作品に出てくる温泉地を具体的に特定した。『草枕』は、作中では「那古井の温泉」となっているが、これは架空の地名であり、実際には熊本の第五高等学校に勤めていた漱石が同僚の山川沢次郎に誘われて、明治三十年末から翌年正月にかけて遊んだ熊本県玉名郡天水町の小天温泉が舞台となっているといわれている。

漱石はその温泉シーンで、はっきりと温泉の効用など「実用上の価値」は全く問題ではないという。では何が大切なのか。

《ただ這入る度に考え出すのは、白楽天の温泉水滑洗凝脂という句だけである。温泉という名は聞けば必ずこの句にあらわれた様な愉快な気持になる。またこの気持を出し得ぬ温泉は、温泉として全く価値がないと思っている》

「凝脂」とは、こりかたまった脂肪、但しだぶついた腹ではなく、軽くて白くつやのある肌の意味であり、白楽天の「長恨歌」の一節で絶世の美女・楊貴妃の身体のことだという。これは作品の伏線になっているのであり、このあとで温泉の「湯烟り」のなかに、ちゃんと白い女身が幽玄にうかびあがるのだ。興味ある方は『草枕』を、いや『温泉小説』をぜひ買い求めて一読していただきたい。

現代作家の温泉ものもなかなか味わいがあった。田中康夫は「伊豆山蓬莱旅館」なるタイトルのものだが、バブル時代に書かれたこの小説を読むと、川端康成などの時代の伊豆の温泉とは隔世の感がある。

世につれ、人の移ろいのなかで、温泉場もおおきく変化してきたことが、この作品集を通読するとよくわかる。そもそも「近代篇」のほうは圧倒的に男女混浴なのである。

先日、中国人の留学生と話していたら、温泉は苦手だといっていた。そういえば以前にも、台湾独立運動を日本にあって展開する台湾生まれの林建良氏と酒場で話していたときに、日本に来たばかりのとき多数の人と一緒に温泉に入るのにひどく抵抗感があったと語っていた。独立の志士として戦う勇猛果敢な林さんの、そのときの微苦笑の表情が忘れがたい。

（1983年文学部卒業）

# 信頼と人間の繋がり

第一東京弁護士会会長
日本弁護士連合会副会長
奈良道博（ならみちひろ）

本年4月から、第一東京弁護士会の会長として会務に携わっている。

大変な激務で、毎日9時過ぎから夜中まで弁護士会に詰めている。土日の出勤も多い。週に2、3度は朝8時過ぎから早朝の会議が入る。

夜遅いのは、会議のほか同時に日本弁護士連合会の副会長を務めているからで、1日の7割程度は日弁連の会務に時間が取られ、一弁の会務を処理するのは夜になる。また当会の伝統で、夕方以降多くの会員が役員室を訪ねてくれるため、夜11時過ぎまで、役員室で会員や時には事務局と酒を飲む機会も多い。眉をひそめる方もあるかと思うが、酒を飲みながら弁護士や弁護士会の将来、さらには目先の会務について活発な議論が行われ、役員にとっては、会員の本音の意見を聴く絶好の機会となる。会務の執行に役に立つことが多い得がたい時間である。

弁護士会は当然のことながら会議が多く、日弁連では、毎週1回朝から晩まで正副会長会議が行われる。年々会務の量が増え、特に本年度は司法制度改革の制度設計から実行の時代に入り仕上げの時期に当たるため議題は多い。また、秋からは各ブロック（高裁所在地毎に設置された弁護士会連合会）大会が目白押しなので、これから毎週のように地方に出張し、週の後半は東京を不在にすることになる。ブロック大会への出席は、その地の弁護士会と意見交換する貴重な機会なので、極めて重要な会務である。また月に1回、理事会が開催される。日弁連にとっては国会にあたる組織であるが、上記の通り議題が山積しているため、2日にわたって朝から晩まで缶詰で行われる。全国単位会の会長はすべて理事なので、日弁連と全国弁護士会員の意思疎通を図る極めて重要な場である。一弁の会務量も当然多い。毎週1回は正副会長の理事者会があるが、どんなに短くても最低3、4時間は掛かる。日弁連の理事会にあたる常議員会は、当会では月に2回開催される。

必要に応じて、これら会議のほか委員会への出席、各種打ち合わせ、最高裁や法務省との折衝・協議、各種シンポ・セミナー・勉強会・集会への出席、国会要請、各種行事での挨拶等枚挙にいとまがない。その合間を縫って懸案の各種制度の改革を実行する必要があるが、1年の任期はいかにも短くて任期中になかなか実行できないのが実情である。

このような激務を仕事を犠牲にして（任期中は仕事はまったくできない）何故ボランティアでやるのか、とよく聞かれるが、弁護士会と後進弁護士に対する「思い」としか言いようがない。弁護士会は唯一自治制度が認められた強制加入団体であるから、この組織を我々弁護士が自ら担っていかなければならない、弁護士会があって初めて我々弁護士は業務ができるという意味で、弁護士会は我々の職業の存立基盤である、という使命感であろうか。

会長になって改めて痛感したことがある。それは信頼と人間の繋がりが重要だということである。このことは法曹に限らずどの世界でも共通だと思うが、信頼と人間関係は一朝一夕に築けるものではない。私はよく若い弁護士に、仕事でも遊びでも「何時でもどこでも誰かが見ているという緊張感を持て」と言っているが、何事に対してもまじめに取り組む、その結果として人から信頼される、その信頼があって初めて人がついてくる、当たり前のことではあるがこれが難しい。卒業生の皆さんはすでに社会で実感しておられることと思うが、学生諸君にそのことをお伝えしたい。

**（1970年法学部卒業）**

# ブラジルの熱い夏の話

ブラジル三井住友銀行
マーケティンググループ部長
内田（うちだ） 肇（はじめ）

日本とは季節が逆の12月から2月までが最も暑くなる、僕にとって六度目のブラジルの夏が訪れようとしている。ブラジル三井住友銀行勤務。三井住友銀行唯一の南米拠点である。

「それではこの件、私にお任せ下さい」。熱っぽく顧客に語りかけた商談の帰路、車中から携帯電話で続きの指示を部下に出し、又、別件の報告を受ける。一方、頭の片隅で今週末の顧客とのゴルフコンペの段取りと来週の地方都市出張のスケジュールに思いを巡らせた。

中央大学を卒業して16年。今は日本のちょうど反対側のブラジル勤務。それも六年目を迎えることになるとは卒業式の時には想像もしなかった。

入行直後の銀座東支店での中小企業担当。その後の一年半のスペイン・マドリッドでの語学研修。勉強なんか全然せずにスペイン中を車で旅をした。帰国後の大阪営業部ではそのツケを払うが如く、連日連夜の深夜残業で新婚早々の妻に呆れられた。東京に戻って日本橋本町支店では鳴かず飛ばずの新規顧客開拓班の班長だった。その中で尊敬すべき数多くの上司、先輩、同僚、仲間、そして僕を心から信頼してくれた数え切れない数の顧客と出会えた事は僕の大きな財産だと思っている。

今、ブラジルで最も力を入れているのが京都議定書における京都メカニズムを活用した二酸化炭素排出権（カーボンクレジット）の本邦日本企業への供給だ。地球温暖化を抑制すべく日本政府は90年に比べ6％の二酸化炭素排出量を抑える公約を行ったが２００６年現在、その進捗は必ずしも良いとは言えない。その中で、僕はカーボンクレジットの世界最大の供給国ブラジルにいる世界最大の需要国日本の銀行の駐在員である。

それならばどうして日伯の架け橋にならないのか。環境という地球全体に関わる問題に対して貢献できるのではないか。それは銀行というインフラを以ってカーボンクレジットを日本へ供給するという誰もが手に付けてない前人未踏のテーマであり、僕にとって幾度目かの大きな挑戦でもあった。

日本の24倍広いブラジルを処狭しと駆け巡り、各地の養豚場のし尿処理設備やゴミ埋立処理場から出るメタンガスの回収プロジェクト。サトウキビの絞りかす（バガス）による発電プロジェクト、世界でも理想的な風のある風力発電プロジェクトの開発など果たすべきことは盛りだくさんである。

「ＯＫ、セニョールウチダ、デッショ・パラ・セニョール（お任せします）」

幾度目かの交渉の後、交渉権を手に入れて、時差12時間先の日本の電力会社へ深夜、人気のない事務所から電話を入れる。

「良かったです。先日の件、まとまりましたよ。今から資料を送るので見て下さい」

「内田さん、ありがとう。早速、検討させてもらいます」

この顧客からの「ありがとう」の一言が一番のエネルギーである。積極的な高値で迫る欧州勢に比べて日本勢の環境は決して楽ではない。然しながらブラジル側の僕を信じてくれた顧客と、同じく遠く離れた僕を信じてくれた日本の顧客が環境という観点で繋がった瞬間である。言葉も通じない、顔も知らない同士が銀行という信用のインフラの上で繋がった瞬間でもある。

日本の京都議定書における第一約束期間は２０１２年までであるが、カーボンクレジット発行に至るまでの国連承認等の一連の手続きが1年以上かかる事を勘案すると、もう残された時間はそう多くない。

固い信念と熱い情熱に裏付けられたブラジルの熱い六年目の夏が僕に訪れようとしている。

**（１９９０年法学部卒業）**

# サーフィンで三宅島復興を

kidesignサーフボード代表
三宅島TAD研究会会長
宮澤和三（みやざわかずみ）

２０００年６月の大噴火。私の故郷である三宅島は噴煙を吐き挙げた。地球の鼓動と化した噴煙は成層圏までも脅かし、稲妻と共に灰の雨をもたらした。

火山ガスに阻まれ４年半もの間、無人となった三宅島。計り知れない大自然の驚異、それを目の当たりにした時、人は成す術を失う。０５年２月変わり果てた島は人類を受け入れた。が、火山ガスは緑を奪い、雨は大地を削り、マグマ流動により島は沈んだ。以前の姿は見る事は出来ない。思い出も微かな記憶だけ。

何から手を付けていいか途方に暮れ、季節風が運ぶ潮の香りに懐かしさを感じつつ小鳥の囀りを楽しんでみる。空の大きさに心打たれ、「火山ガスは？」と雄山に問いかける。家の復旧に追われる毎日を過ごしながら、家族との信頼を新たに深め、友人との久しぶりの会話には４年半が長かった事を思う。

荒れ果てた島は人々の安らぎを奪い、不安を与えている。４年半が長かったことは確かだがそれを感じるのは人間であって、地球はどう感じているのだろう。高齢化が進む島、火山ガスとの共生で未来の三宅島はどうなってしまうだろう。この噴火により島は沈下し、雨は大地を削り泥流となり海に流れていく。

新たなサーフポイントが誕生しているのではないのか――そう考えた。

サーフィン大学選手権（１９９５年）で優勝し、様々な経験、色々な人との出会いにより多くの事を学んだ。三宅島の未来のためにこの経験を生かしたいと４年半もの間、答えを探していた。

破壊と誕生を繰り返す地球の鼓動は波のリズムとなって島のあちこちから鳴り響いていた。

誕生したサーフポイントへの挑戦は、未知の世界であり危険を感じるポイントもあった。挑戦を繰り返した先にはクリーンな波が迎えてくれる。勝手気ままな波に遊ばれている毎日であった。

誕生したサーフポイントは10数カ所に及び、新たな観光資源として、将来性、信頼性、危険性の調査に挑んだ。自然相手の調査には多くの費用と時間、優秀な人材が必要であった。

世界に類が無いこのプロジェクトは多くの人々の協力により動き出した。費用は私のスポンサー企業、東京都、島の企業の理解を頂き、人材は日本を代表するプロサーファーが賛同、地元サーファーは海底、波高、潮流調査に時間を費やした。プロサーファーは研ぎ澄まされたセンスをスタイルに変え人々を魅了し、様々な答えを導き出した。

噴火災害により誕生したサーフポイントはこれからの三宅島に新たな風を送り込んでくれる。計り知れない大自然。神様が贈ってくれた波、無くしてはいけないと痛感した。この調査活動をより多くの人に知ってもらうため、また噴火の爪跡や島の現状を知ってもらうためにＤＶＤを制作、読売新聞東京版（06年４月２日付）に紹介された。

だが、人類は愚かだ。今三宅島では、誕生したサーフポイントを消滅させる計画が実行されている。

海の事も波の事も知らない役人の浅はかな考えは、自然の有難みを知らないからではないのかな。全ては自然界あっての人類。自然の中で生かされている事を忘れないで欲しい。自然が無くなれば人も環境も未来も変わり、やがて道も変わりゆく。価値の違いを見極めることが未来に繋ぐ大切な道なのではないでしょうか。

**（１９９７年経済学部卒業／宮澤さんのサイト http://www.kdsurf.com）**